

優秀賞 独立行政法人水資源機構理事長賞

節水の心を捧げる

愛知県 滝学園滝中学校

二年 伊藤 正子

「弥生時代の人々は、井戸を掘って水が出たら、埴輪を井戸に沈めていたんですよ。」
春休みに訪れた奈良県立橿原考古学附属博物館のことだ。観光ボランティアの方の説明を聞いた私の頭の中には、クエスチョンマークが縦横無尽に飛び交った。なぜ、埴輪を井戸に沈めるんだろう・・・。それぞれの展示物に掲げられた注釈をていねいに読んで、博物館を回りきっても疑問は解決しなかった。初対面の人が苦手な私だが、思い切ってボランティアの方に尋ねてみた。ボランティアの方は嫌な顔をするどころか、よくぞ聞いてくれましたとばかりに答えてくださった。

「人間は、水がなくては生活できませんね。でも、昔は、水道などという便利な物はありませんでした。そして、飲み水となるきれいな水が得られる井戸を掘り当てるのは、とても大変なことでした。だから、生命の源となる飲み水を得られる井戸への感謝の気持ちとして、埴輪を捧げたのではないかと考えられているんですよ。」

埴輪は、井戸への捧げ物だったのだ。それを聞いた私は、埴輪は、水の神様への捧げ物だったのではないかと感じた。古墳に埋められていた埴輪の意味を考えれば、うなずける。水は、今よりもずっと大切に扱われていたにちがいない。

奈良からの帰りの車の中で、私は家族に宣言した。

「明日は一日、ペットボトルにためた水で生活することにします。」

「私も一緒にやろうかな。」

春休み、何かしたそうだった姉も加わった。

翌朝、二リットルの空のペットボトルを一人一本ずつ用意して、節水生活をスタートさせた。川や井戸に水をくみにいくわけじゃない・・・。と、簡単に考えていた私だったが、水道の蛇口をひねれないのは、相当なストレスだった。

顔を洗う。歯みがきをする。毎日のお決まりの行動がスムーズに運ばない。時間が倍近くかかる。学校に行く日なら、完全に遅刻だ。うーっ、歯ブラシをコップに入れた水でカシヤカシヤ洗ったけど、よごれが残っている気がする。そんなことを思っていたら、姉が少し困ったような顔できいてきた。

「どうする？トイレ。流したら、だめなんだよね？」
忘れてた。水洗トイレか・・・。そうだった！

「十八年くらい前、牧尾ダムがピンチになったとき、夜中は断水で水が流せなかったって、お母さんにきいたよね。お風呂の残り湯で流したって、言ってたよね。」

姉と私は、トイレに行くたび、お風呂の残り湯を運んで流した。午前中だけで、姉と私はへトへトになった。水道が使えないって、こんなに大変だったんだ。二人が、水道のありがたみを知るのに、さして時間はかからなかった。

私が住んでいる東海市は、愛知用水ができるまで、ため池を頼りに生活していたそうだ。愛知用水の完成で、人々の生活は楽で、豊かなものになった。農業も工業も発展した。愛知用水のおかげで、現在の暮らしがあるといっても過言ではない。厚生労働省令により、水道が整備されている。浄水場でろ過、消毒された安全でおいしい水が、各家庭に送られてくる。この安全でおいしい水を後世まで伝えるには、一人一人が水を無駄使いせず、よごさない工夫をしなくてはならない。なぜなら、水は有限であり、循環しているからだ。水を守ることは、七十パーセント以上が水でできている自分の体を守ることにつながる。ペットボトル生活はやめたが、蛇口から出る水を鉛筆の太さにし、出しっ放しをやめた。弥生時代の人が井戸に捧げ物をしたように、私は水道に節水の心を捧げる。それは、地球を守り、自分を守ることにつながるのだから。